

アヒメレクのもとで

(サムエル 21:1-15)

一、何のために行ったのか

1節をご覧ください。〈ダビデはノブの祭司アヒメレクのところに行った。アヒメレクはダビデを迎え、恐る恐る彼に言った。「なぜ、おひとりで、だれもお供がないのですか。」と書かれています。ノブは「祭司の町」と呼ばれた場所で、サムエル記第一1-4章に出てまいります祭司エリの子孫たちが住んでいた由緒ある場所でした。ダビデは、サウル王が自分を殺そうとしていることを知り、祭司の町ノブに行きました。何のためでしょうか。21章を読みますと、ダビデが祭司アヒメレクから普通のパンではなく聖別されたパンを受け取っています(↓21:4-6)。さらに、剣を求め、ペリシテ人ゴリヤテの剣を受け取っています(↓21:8-9)。こうして、次のように読みがちです。ダビデはサウル王から逃れてきた身であり、食べるものがなかったから祭司のもとに行つてパンを求め、武器を求めた、と。

ところが、それ以上に大切な理由があったと考えられます。それは、後にノブの祭司たちを皆殺しにした冷徹な男エドム人ドエグの口から出ています。

〈22:9-10〉をご覧ください。ダビデがノブの祭司アヒメレクの所に行つ

た理由は、主なる神からのお告げを求めたためでした。主のお告げとは、たとえば「安心して行きなさい。あなたがたのしている旅は、主が認めておられます。」(士師記18:6b)という類いの、祭司の口から出る祝福の言葉です。それが当時の文化でしたから、ダビデが主のお告げを求めたのは、信仰者としてふさわしいものでした。21章に戻りますが、9節で、祭司アヒメレクが語っています。「あなたがエラの谷で打ち殺したペリシテ人ゴリヤテの剣が、ご覧なさい、エポデのうしろに布に包んであります」と。エポデは祭司が主の託宣を求めるときに着用した服でした。ダビデとアヒメレクがエポデの前に立っていたことからしても、ダビデが主のお告げを求めたと受け止めることができます。では、なぜそんなに大切なことが、21章に書かれていないのでしょうか。その理由として可能性が高いのは、サムエル記が編集、ないしは執筆された時、基になった資料にその部分が失われていたことです。

二、「引き止められていた」

21章において気になるのは、エドム人ドエグについての記述です。7節に〈その日、そこにはサウルのしもべのひとり、主の前に引き止められていた。その名はドエグといって、エドム人であり、サウルの牧者たちの中のつわものであ

った〉です。読者はこの記述に、「ウム?」と思います。サウル王のもとから逃れてきたダビデが、祭司アヒメレクによる主のお告げを求め、食料としてのパンを求め、武器としての剣を求め、それらのすべてが祭司アヒメレクによって備えられた時、サウル王のしもべであったエドム人ドエグが〈主の前に引き止められていた〉というのです。そして、この出来事の後、ドエグはサウル王に報告しています(↓22:9-10)。こうして、サウル王は怒り猛り、祭司アヒメレク、及び祭司一族を呼び出しました(↓22:11)。サウル王は語りました。

「アヒメレク。おまえは必ず死ななければならぬ。おまえも、おまえの父の家の者全部もだ。」(22:16)と。サウルの家来たちが祭司を討つことに躊躇していると、王はエドム人ドエグに命じ、祭司を殺害しました(↓22:18-19)。後にダビデは思ったはずですが、自分がこのような目に遭わなければならないのかと。なぜ、自分が行つたことにより、主の祭司が皆殺しにされなければならないのかと。ですが、私たちは知る必要があります。すべての、私たちが考える、起きて欲しくないことは、主の善き御計画が進むことにつながっていると。

三、ペリシテの王のもとで

そういうメッセージのつながりで、21章に戻り、残された箇所を見てまいります。それは、ダビデがガテの王アシシュのもとに逃れた話です。21章10節です。〈ダビデはその日、すぐにサウルからのがれ、ガテの王アシシュのところへ行った。〉とあります。実は、ここには大きな矛盾があります。もし最初からダビデがペリシテ人の町ガテに逃れようとしていたのであるなら、祭司アヒメレクのところに行き、ペリシテ人ゴリヤテの剣を受け取るはずがないからです。そんなことをしたら、ペリシテ人の恨みを買ひ、自分から殺される行くようなものです。この矛盾はどのように受け止めたらよろしいのでしょうか。可能性として考えられることは、元々は別々に存在していた物語を著者がつなぎ合わせたことです。では、著者ないし編集者は、ダビデについて何を語ろうとしたのでしょうか。こうだと思いません。逆境が続く中にあつても、ダビデが王となるべく、主の見えざる手が及んでいるというメッセージです。

創造主なる神はイエス・キリストによつて罪の問題を解決してくださいました。ならば、神が私共にもたらすのは祝福であつて、呪いではないと知りまします。人の心には多くの計画があります。しかし主のはかりごとは成りません。ゆえに、元気を出そうではありませんか。